

## 21 郷家一二三説教

日本ホーリネス教団 坂戸キリスト教会牧師 郷家 一二三  
牧師：25年 説教塾：24年 セミナー参加：20回以上

### 奉仕教会について

高校2年生の時に坂戸キリスト教会に集い初め、ほぼ48年間、この教会と共に歩んできました。36歳で献身し、1991年(39歳)から坂戸キリスト教会の副牧師として奉仕を始め、2009年から主任牧師となり今日にいたります。二組の牧師夫婦と、信徒説教者(勸士)と執事、責任役員など、いろいろなスタッフが協力して奉仕しています。できるだけ多くの教会員が参与する、参与型の教会形成をめざしています。

### 説教

説教題：「胸焼かれる神の憐れみの招き」

聖書箇所：新約聖書マタイによる福音書 第9章9-13節

この礼拝に与えられております聖書の御言葉を開きます。新約聖書マタイによる福音書第9章9節から13節までです。

イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。イエスはその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。イエスはこれ聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

さきほど賛美しました讚美歌280番の歌詞を三番まで読みます。「わが身の望みはただ主にかかれり 主イエスの外にはよるべきかたなし わが君イエスこそ救いの岩なれ 救いの岩なれ」「風いと激しく波たつ闇夜も みもとに錨をおろして安らわん わが君イエスこそ救いの岩なれ 救いの岩なれ」「この世の望みの消え行くときにも こころは動かじみ誓い頼めば わが君イエスこそ救いの岩なれ 救いの岩なれ」。わたくしどもの救いの根拠、信仰の不動の岩は、主イエス・キリストであると賛美しています。何が起こっても動じない信仰を持ちたい、と言う願いが、わたくしどもにはあります。そういう願いは大切にしなければならないと思います。でももし、自分が自分の中にそういう信仰を手に入れることだと考えたら、大きな間違いを犯します。また誰であっても愛せる愛を持ちたいと願います。しかしその愛の不動の根拠を自分の中に持てると思えば、あのペテロが主イエスを三度知らないと言って愛を裏切ったとき、愛の根拠は崩れて行きました。ペテロは主イエスに「わたしを愛するか」と問われた。ペテロは「主よ、わたしがあなたを愛していることはあなたをご存知です」と答えた。自分のうちに主イエスを愛せる愛の根拠はもうない。それは砕かれた。そこでもペテロはなお主を愛した

いと願った。しかしこの愛の根拠は自分の中にはもはやない。主イエスが自分のこの愛を知って下さっていることの中に、主イエスに知られている中に根拠がある。そう信頼して答えたのです。主イエス・キリストはそれを受けとめてくださり、ペテロに主の羊を養うことを委ねられました。さらにペテロの愛をご存知の主イエスは、ペテロの殉教を予告されたのです。主イエスへの愛のために命をささげることが予告されたのです。また誰であっても赦し受け入れる心を持ちたいと願います。でも自分の中にその心の根拠を持つことはできないのです。ただ主イエス・キリストが赦して下さった赦しの中に、わたしの赦せる根拠があるのです。

さらに、どんな汚れや誘惑の中にあってもきよく生きられる信仰を持ちたいと願います。でもその根拠をわたくしどもの中に、わたくしども自身で持てると思うのは間違いです。実際、わたくしどもの心は実に罪の思いに占領されやすいのです。詩篇の73篇を読んでみて下さい。73篇には、妬みの思いが正直に描かれています。ねたみの獣ようになっていた自分の姿が描かれています。詩人は、目の前に悪しき者の栄える姿を見て、その豊かで健康で何も恐れない姿に「ねたみを」感じます。悪しきものが平安で富が増し加わっている姿をねたむ思いが、心に満ちてくる。その時に詩人は、自分で自分の心をきよくしようとします。罪を犯さないように手を洗うのです。でもそれは実にむなしいことだと自分が知っているのです。詩人は神殿に行き、神の御前で悪しき者の最後を見せられます。悪しき者の最後を悟るのです。その時に激しいねたみに心が満たされていたことを強く刺されます。神の御前でねたみの獣であることを知るのであるのです。けれども神はそんなわたしの右の手をしっかりと握っていて、さとし導いてくださっているとわかるのです。きよい神がわたくしどもの右の手を握ってくださっていることに、きよく生きられる信仰の根拠があるのです。

きよく生きられる根拠、赦し受け入れられる根拠、愛し続けられる根拠は、わたくしどものうちではなく、主イエス・キリストにあるのです。「イエスこそ救いの岩なれ 救いの岩なれ」と賛美しましたように、不動の信仰の根拠は、きよさも、赦しも、愛も、それらの全ての根拠は、主イエス・キリストにあるのです。この方だけが不動の岩なのです。この曲の折り返しは、「新聖歌」では、「今は主キリストわれにありて生く、われは早や死ねり」と歌われます。ガラテア書の2章20節「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」を受けています。賛美歌にしても新聖歌にしても、歌詞は共通しています。信仰は神から与えられ、神に根拠を持つもので、全くの恵みとして与えられたものです。ですから信仰とは、「信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら生きる」ことです。わたくしどものために、信じるだけで救われる罪の赦しの信仰を創始して下さり、その信仰を与えて下さり、保持し導いて下さり、最後には再び来られて完成して下さる主イエス。信仰の根拠であられる主イエスを信頼して、主イエスに従って行くことなのです。

今朝開きましたマタイによる福音書の9章には、マタイという人が主イエスに招かれて「わたしに従いなさい」と言われたときに、「立ち上がってイエスに従った。」と描かれています。このように主イエスから「従いなさい」と招かれて、すぐに立ち上がってイエスに従ったその根拠は、マタイの中にはないと私は思います。この箇所を繰り返し読むならば、実に淡々として、そっけないほどに抑えられて書かれています。劇的な出会いのはずなのに、そう描かれていないのです。「イエスはそこをたち、通

りがかりに」と書き出されます。通りがかりなのです。そして「マタイという人が収税所に座っているのを見かけて」と続きます。主イエスの方からマタイを見かけたのです。それが屋外であったか屋内であったかは分かりません。そして主イエスに「従いなさい」と招かれた。マタイは立ち上がってイエスに従った。それだけなのです。ルカによる福音書には「なにかも捨てて」とありますが、マタイにはないのです。これだけなのです。でも「わたしに従いなさい」と言われた主イエスの言葉は、当時の徴税人に向けられる言葉ではないのです。ありえない言葉なのです。外の職業の人なら、こういう言葉かけられることがあるかもしれませんが、徴税人に対して絶対に言われる言葉ではないのです。ありえない招きの言葉です。しかし主イエスは事実こう言われ、招かれたのです。「徴税人や罪人」とすぐ後に出てきますが、徴税人は罪人と並べられ、罪人そのものでした。ユダヤの国を支配していたローマ帝国が税金をユダヤの人々にかかけました。この税金を集める徴税の権利を買い取って、同じ民族を裏切ってローマの政府のために、税金を取り立てたのです。しかも当時は、決められていた額を自由に変更して徴収できた。徴税人は憎しみとさげすみの対象であり、税金を納める人々は、お金を徴税人に渡すときに、心の中で「お前は地獄に落ちろ。」と言っていたでしょう。そして受け取る徴税人も、目は口ほどにものを言う、ではありませんが、納める人々の厳しい視線をあびていたし、もうそんなことには慣れっこになっていたでしょう。

そうだったら、徴税人の仕事をやめればいい、と考えるでしょう。しかし徴税人の仕事は、まさに濡れ手で粟なのです。どんどんお金が儲かる仕事であり、一度始めたら止められなくなる悪の魅力にとらわれるような仕事だったのです。何といわれようと我慢さえしたら、富が得られ、膨大なお金の力を持つことができたのです。それに加えて、もし徴税人からユダヤの社会にもどろうとするなら、不正に取り立てた金額に20パーセントの額を加えて返さなくてはならない律法の規定がありました。この仕事から足を洗おうとしたら、全財産を失うことは間違いないのです。徴税人マタイは、罪の闇に覆われていました。そのマタイのところに、主イエスの方から来てくださり、通りがかり、マタイを見かけ、マタイに近づき、「わたしに従いなさい」と言葉をかけられ、ご自分のあとに従ってくるように招かれたのです。そして、「彼は、立ち上がって、イエスに従った」のです。こんな不思議なことが起こるのだろうか、わたくしどもは考えます。あまりにも淡々と描かれているからです。もっと劇的な決断だったはずですが、普通なら、全財産を処分したとか、両親に別れの挨拶をすとか、なにかもっとあってはいはずなのですが、マタイによる福音書には全く書いていないのです。「わたしに従いなさい」と言われ、「彼は立ち上がってイエスに従った。」これだけなのです。

どうしてこういうことが起こるのか。いろいろと思いめぐらしました。ひとつ言えることは、「わたしに従いなさい」とは、主イエスの権威ある言葉だということです。すぐ前の9章2節から中風の人が床の上に寝かされたまま、主イエスのおられる家まで連れて来られたことが記されています。そうやって連れてきた人々の信仰を見て、中風の者に「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」と言われました。すると、律法学者たちは心の中で、「このイエスと言う男は、軽々しく罪の赦しを告げて、神を冒瀆している。罪の赦しは神以外にできるはずがない。だいたい、中風を治せないから、口から言うだけでいい赦しの言葉を出しただけだろう。」と思ったのです。その時に、主イエスは、律法学者たちの心の中の考えを見抜いて、「なぜ、悪いことを考えているのか。『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」といわれ、中風の人に、「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい」と言われたのです。

するとこの男の人は、起き上がり、家に帰って行ったのです。罪の赦しは神の権威により、神以外に宣言できるものではないのです。ここで主イエスが宣言された罪の赦しは、神がお与えくださった権威によってなされた宣言でした。罪赦された男は、罪の結果と考えられていた中風が癒やされたのです。そこで、これを見ていた群衆は、あまりの鮮やかな赦しと癒やしに神の臨在を感じ、恐ろしくなりました。そして「イエスと言うこの人に、これほどの権威をゆだねられた神を賛美した」のです。神の御前で神の権威ある言葉を聞き、それが本当の赦しであると見た人々は、恐れつつ神を賛美したのです。主イエスの言葉には神がお与えになった権威があると多くの人々が賛美したのです。

マタイはこの出来事を知っていたかどうか分かりません。でも主イエスが自分の前に来られ、「わたしに従いなさい」と言われたときに、主イエスの権威ある言葉に従う以外になかったのだと思います。マタイを覆っていた罪の闇から、ぐっと主イエスのみもとに引き出す権威があったのです。神の権威ある招きの言葉の力です。神が遣わされた神の御子、主イエス・キリストの権威ある招きの言葉だからこそ、マタイを立たせ、すぐに従わせる力があったのです。むしろ、その出来事を不思議だと思うわたくしどもは、この招きの言葉の権威以外のところに、つまりマタイの内面や周辺に、従った根拠を捜そうとしているのではないのでしょうか。召しに従って行った根拠は、召された主イエス・キリストの中にあるのです。召してくださった主イエス・キリストにこそ、召された人の召しの根拠があるのです。人間の中にはないのです。

いまま主イエスはこの礼拝におられて、この言葉を語ってくださいます。「わたしに従ってきなさい」。けれどもわたくしどもはこの言葉を聞くときに、わたくしどもの中に招かれる何かの資格とか、優れた点や、能力や、ほめられる功績などが全くないと思うのです。いいえ逆に、わたくしどもの心の中で、誤れる良心が、お前は律法の一つも守っていない、今なお悪に傾く性格を持っているのではないかと責め立てて来て、従うことをためらわせるのです。権威ある主イエスが「わたしに従いなさい」と招かれているのです。ですから、この主イエスの権威ある招きの言葉が、わたくしどもを縛っている一切のものから解き放ってくれます。そして、主イエスが招かれるから、そこに根拠があるから、招く主イエスに信頼し、この招きの言葉に従って行きたいと立ち上がるのです。

マタイが立ち上がって従ったときに、マタイの思っていなかった出来事が起こります。大勢の徴税人と罪人たちが、主イエスが食事をされている家に押しかけてきたのです。マタイの仲間たちと、当時罪人と言われていた高利貸しとか売春婦とか、昔盗みを働いた人とか律法を守らない生活をしている貧しい人とか、それら大勢の人たちが主イエスのもとに集まったのです。マタイが集めに行き行って集まったわけではありません。主イエス・キリストの権威ある言葉が発せられ、それによって立ち上がって従って行ったマタイの姿を見ていた人たちが、この出来事を伝えたから集まってきたのです。主イエスというお方はマタイのような者を招かれる方なのだ。それが人から人へと伝わり、あの徴税人のマタイが招かれたのなら、同じ徴税人の俺も招かれていいはずだ。罪人の私にも声かけられている。そう受け止めて、主イエスのもとに集まってきたのです。まさに権威ある言葉の力、福音がもつ力によって、人々は集まってきたのです。マタイも喜んで一緒に仲間と食事をし、ここに主イエスを中心として、徴税人や罪人と言われていた人々との楽しい食事の輪が広がって、ここからマタイの教会が誕生して行ったのです。

ところが、そこに冷たい風が吹き込むようにして現れた人々がいます。ファリサイ派の人々です。マタイによる福音書全体の中では、何度も、そしていつも主イエス・キリストの前に立ちはだかるようにして、ファリサイ派の人々が登場します。わたしはそういう人とは全然関係ないと思わないで下さい。わたくしどもも、立ち上がって主イエスの言葉に従わなければ、主イエスの招きの言葉に抵抗し、自分は招かれるにふさわしくない者だとこだわるなら、ここに登場したファリサイ派の人々と同じように、主イエスの前に立ちはだかることになるのです。あの弟子のペテロでさえ、主イエス・キリストが十字架につけられることを話されたときに、主イエスを引き寄せて、いさめました。そんなことがあつてはなりません。十字架に向かう主イエスの前に立ちはだかったのです。そのペテロに対して、主イエスは「サタンよ、退け」と言われました。あなたが立つ場所は、わたしの前ではなく、わたしの後ろだと、諭してください、ペテロを正しい位置にもどして下さいました。ここに現われたファリサイ人たちは、徴税人や罪人たちを招き、従わせることは許せなかったのです。一緒に食事をするのが許せなかったのです。主イエスを「先生」と読んでいます。律法の教師と認めていたのでしょう。それならなおさら、弟子としてマタイのような徴税人を招くことはありえないと言ってきたのです。しかも主イエスに直接にはなく、弟子たちに、「あなたがたの先生は、なぜ徴税人や罪人と食事をするのか。」と、律法に違反しているではないか、と訴えてきたのです。ファリサイ派の人々は、自分たちが作っている社会の秩序をひっくり返すことになるこの主イエスの招きを認めることができなかったのです。

ファリサイ派の人々がしていることは、何でしょうか。ローマの信徒への手紙第8章31節から39節までの言葉を用いて、「わたしたち」を「徴税人と罪人たち」と置き換えて読んでみると、よく分かります。「だれが神に選ばれた徴税人と罪人たちを訴えるでしょう。徴税人と罪人たちを義としてくださるのは神なのです。だれが徴税人と罪人たちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、徴税人と罪人たちのために執り成してくださるのです。だれが、キリストの愛から徴税人と罪人たちを引き離すことができます。」  
「どんな被造物も、徴税人と罪人たちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、徴税人と罪人たちを引き離すことはできないのです。」

ファリサイ派の人々は主イエスが招かれた徴税人や罪人たちを、訴えてきたのです。主イエスが赦された人々を罪に定めなおそうとしたのです。彼らを主イエスの愛から引き離そうとしたのです。しかし主イエスはそれをお許しになりませんでした。そこで主イエスはこう言われたのです。「医者をするのは、丈夫な人ではなく病人である。」病人に必要なのは病気を治してくれる医者です。主イエスは罪という病から癒し救う医者として、徴税人マタイのところに来られ、招かれたのです。罪に苦しんでいる病人たちのところに来てくださったのです。病人が医者の方に来るのではなく、医者のほうから、医者を求めている病人のところに来てくださったのです。そして病人を招き、赦し、一緒に食卓を囲み、元気を取り戻させてくださるのです。

主イエスはここで、旧約聖書のホセア書第6章6節を引用されます。このことはマタイによる福音書にだけ記されています。もともとのホセア書は、「わたしが喜ぶのは愛であっていけにえではなく、神を知ることであって焼き尽くす献げ物ではない。」という言葉です。父なる神が喜ばれることは、「神を」愛することと、「神を」深く知ることであり、犠牲ではない、と言うのがホセア書6章6節の意味です。しかし主イエスは「神を愛し、神を知る」という部分を、「神が求めておられるのは」と変えて示され

たのです。ファリサイ派の人々は神の律法を愛し、断食とか善行を自分を犠牲にして喜んで実行していたのです。しかし、それが傲慢を生み出し、自分で自分を義人だと思わせ、同じようにしない人々を罪人と断罪し切り捨てていったのです。罪人を救うことができず、近寄ることもしないで、罪人への憐れみの心を全く失ってしまったのです。ファリサイ派の人々よ、父なる神があなたがたに求めておられるのは、憐れみの心であり、自己犠牲といういけにえではない。わたしを「先生」と呼ぶのなら、はっきり律法の本髄を教えよう、それは「憐れみの心」だ。いけにえではない。この言葉を「行って学びなさい。」と命じられたのです。「行って学びなさい。」とは、この食事の場所から出てゆけという意味ではなく、当時のユダヤ教の教師が用いていた指導の言い方で、学んできなさいと言う意味です。ファリサイ派の人々よ、あなたがたは徴税人や罪人たちを訴え、罪に定め、愛から引き離そうとしているが、あなた方が失っている大切なものがある。それは、憐れみの心である。主イエスは彼らの心の空洞部分が何であるかを指摘され、憐れみの心を失ったら、すべて無意味になると教えられたのです。

憐れみの心を失うことは、わたくしどもにも起こることです。わたくしは長く病んでいる方を訪問し、賛美し、祈り、聖書の短い話をしています。あるとき、痛みの長く続く中で、あまりの辛さから、もう限界であり、もう死にたいと一言もらされたのです。それがどんなに辛い日々なのか理解できなかったわたくしは、そういうことを言われると困るんだよな、と心で思いました。そしてどうしたらいいのか分からなくなりました。ある時、信頼する先生にこのこととお話し相談しました。そしてどう導いたらいいのか聞こうとしました。先生はじっと聞いてくださり、こう言われたのです。「うむ、そうだね。そういうことを言うのも分かるよねえ。」と深く同情し、共感され、憐れみの心を示されたのです。その時に、わたし自身は、どう導くかが問題なのではなく、自分が憐れみの心を失っていることが牧師として決定的に問題なのだと気づいたのです。そして悔い改めました。先生は、ファリサイ人になりかかっていた牧師であるわたくしを、もどして下さったのです。寄り添う憐れみの心がなかったら、病気の説明をし、苦難の中における信仰の意味を説明し、それによって得られる望みをいくら説明できたとしても、望みそのもの慰めそのもの憐れみそのものを携えて行く者でなかったら、わたくしどももファリサイ派の人々になってしまうのです。ですから、主イエスはそういうファリサイ派の人々に、またわたくしどもに、このホセア書の言葉を語られたのです。「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない。」

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。」この言葉は、そこにいた徴税人や罪人たちも聞いていた言葉です。わたくしはもう一度ホセア書全部を読みなおしました。そしてわたしの心をとらえる言葉と出会いました。それはホセア書第 11 章 8 節の言葉です。「ああ、エフライムよ、お前を見捨てることができようか。イスラエルよ、お前を引き渡すことができようか。アドマのようにお前を見捨て、ツェボイムのようにすることができようか。わたしは激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる」。父なる神は、ご自身を裏切ったイスラエルの人々に対して、見捨てることもしない、滅ぼすこともしない、そうではなく、わたしは激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる、と言われたのです。そして 9 節では「わたしは、もはや怒りに燃えることなく、エフライムを再び滅ぼすことはしない。わたしは神であり、人間ではない。お前たちのうちにあって聖なる者。怒りをもって臨みはしない。」と語られたのです。

父なる神の胸を焼かれる憐れみの御心が、ついに御子主イエス・キリストを天から遣わされたのです。主イエス・キリストは父なる神の憐れみの御心を受けて、あの天の栄光の位を捨てて、この地上に人となられて来られたのです。父なる神の憐れみが主イエスを遣わされ、主イエス・キリストご自身が、神の徹底した憐れみの心をお示しくださったのです。それは医者として医者自身が罪に苦しむ人々の所に来られ、救い主として十字架に向かって行かれたのです。そして十字架に向かって行く道の途上で、わたしに従ってくるようにとマタイを招かれたのです。この招きは、胸焼かれる神の憐れみの招きであり、憐れみそのものである救い主イエス・キリストの招きです。

最後に主イエス・キリストが宣言された言葉があります。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」 わたしが父の憐れみの心によって、この地上に来たのは、罪人を招くためである。神の前に正しい人、義人はひとりもいません。神の前に、義人はいない、ひとりもいないのです。神の前に自分が正しいと言える人はひとりもいません。ですから、全ての人は罪人であり、主イエス・キリストは全ての人を救いに招くために来られたのです。マタイは「わたしに従いなさい」と言われ、自分が思ってもいなかった声をかけられ、主イエス・キリストの権威ある招きと、深い憐れみの招きに、立ちあがって従ったのです。そして徴税人と罪人たちも立ち上がって押し寄せてきて、みんなで食事をして、ここにマタイから始まる教会が誕生したのです。この教会も聖餐を礼拝で祝ったことでしょう。聖餐の制定は主イエスが十二弟子との最後の晩餐で行われたものです。教会はこれを大切に守り続けたでしょう。それと同時に、マタイの教会が主イエスの招きによって生まれたときの、あの最初の食事会は、この教会の恵みの出来事として語り伝えられたことと想像します。またこれも想像ですが、神の憐れみを学べといわれたファリサイ派の人々の中からも、後に主イエス・キリストの福音を信じ、この教会の聖餐に加えられた人が起されたかもしれません。

主イエス・キリストがわたくしどもの前に立たれて、わたしに従いなさい、と言われて、もしまだ迷うとしたら、はたしてわたしが立ち上がって主に従ったとして、なにが起こるのか、この日本が世界がどう変わるのか、ひとりが招きに従ったとしてもいったい何が変わるのだろうかという、思いわずらいが生まれるからではないでしょうか。

でもこの招きは、全く神の自由な御意志からの、憐れみからの招きです。それに応答するわたくしどもの服従も、招かれる主イエスを信頼しての応答であり、その結果がどうなるかは、招かれた主イエスがお決めになることです。実際、マタイの場合でも、大勢の仲間が押し寄せるとは思っていなかったし、自分を最初にしてマタイの教会が誕生するとは想像もしていなかったし、その教会からこの福音書が生まれ、2000年を経ても、なお読みつがれているとは思ってもいなかったことなのです。召して下さる根拠は主イエス・キリストの中にあります。わたくしどもを召して下さる神の真実が、立ち上がって応答する者を導いてくださるのです。召して下さる主イエスに従っていただけなのです。

讃美歌280番の4節はこういう言葉です。「見ぬ世に移りて まみゆるその時 主の義をまといて み前に立たまし わが君イエスこそ 救いの岩なれ 救いの岩なれ」。地上の、主イエス・キリストに従う歩みを終えて、見ぬ世に移りて神の前に立つときに、わたくしどもは洗礼を受けて救われたときに着せられた義の衣をまといて、み前に立つのです。神の審判は厳しく、地上で隠しおおせた罪もすべて明らかにされるでしょう。しかし死んで神の御前に立つときに、立てる根拠がわたくしどもにはなく、

主イエス・キリスト、岩なる救い主にあります。主イエス・キリストの十字架を信じた救われたものは、キリストの義の衣を着せられて地上を歩み、見ぬ世に移ります。まみゆるその時、主イエス・キリストの義の衣をまといつつ、神の前に立つのです。そしてわたくしどもの傍らには主イエス・キリストがお立ち下さるのです。わたくしどもはその時に、主イエスに申し上げることができます。「主よ、あなたに招かれて、立ち上がり従ってまいりました。このようなわたくしどもを選び、お招きくださり、ここまで導いて下さった深い恵みを感謝いたします。」

祈ります。

ただあなたの胸焼かれるような憐れみの心によって、主イエス・キリストがわたくしどものところに来てくださったことを心から感謝いたします。わたくしどもを救いに召して下さり、今朝またもう一度、わたしに従いなさいという御言葉を通して語りかけてくださり、新しい使命に召して下さる恵みをありがとうございます。闇のような中にうずくまっていたわたくしどもを立ち上がらせてくださる権威があなたにあります。まことに憐れみの足りないものであります。でもあなたを離れて憐れみを学ぶことも、身につけることもできません。どうか主よ、生涯、あなたに従い続ける者として、この招きに応え続けさせてください。わたくしどもを導く御霊が、もうお前は死んだのだ、キリストがあなたのうちに生きているのではないかと、語りかけてください。このキリストの言葉に従い続けさせてください。主イエスの恵みがわたくしどもをとらえていること、またわたくしどもがあなたに従いたいと願っていることを、あなたが知って下さっていると信じます。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。